

### 3 歳児実践事例

## 「一人一人が自分のやりたいことに関わり、楽しいと感じたことを繰り返して遊んだ事例」

### 1 子どもの実態

〈3 歳児〉

- 4 月入園の 3 歳児は、7 月中旬から 2 クラスが合級し、一緒に生活し始めた。夏休み明けからは、転入児が 1 名加わり、満 3 歳児が入園したことで、環境が変わり、3 歳児の中には不安や戸惑いを示し、登園時に泣いたり、なかなか遊び出せなかったりする姿が見られた。教師が、不安や戸惑う姿を丁寧に受け止め、遊びや生活を重ねてきたことで、少しずつ幼稚園生活の楽しさを思い出し、安心して遊び出す姿が増えてきた。
- 自分のやりたいことを楽しみながらも、製作の場、乗り物や家などに見立てた場で、偶然居合わせた友達に興味を示し、まねたり、同じつもりになって遊んだりすることを楽しむ姿が増えている。
- 友達と同じ場で遊ぶ中では、思い付いたことや気付いたことを友達に言葉や行動で表現しながら遊ぶようになってきた。一方で、自分の思いだけで遊びを進めたり、言葉が足りずに思いがすれ違ったりすることがある。教師が言葉を補ったり、言葉にして伝える姿を支えたりすることで、自分なりの言葉で友達に伝えようとするようになってきた。

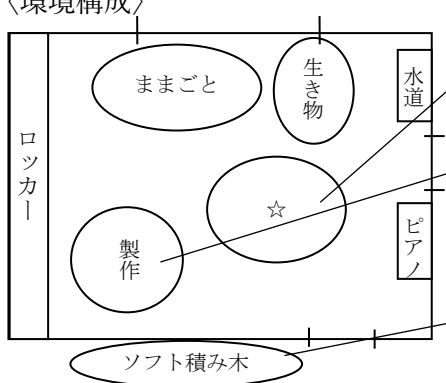
〈満 3 歳児〉

- 新しい環境に対する不安から登園時に泣く、表情が固まるなどの姿が見られた。生活の流れが分かり、教師や幼稚園生活に対する安心感ができてきたことで、喜んで登園する姿が増えた。
- 登降園時の身支度、排泄や着替えなどは繰り返し経験してきたことで、教師と一緒に自分からしようとする姿が見られ、その習慣が身に付いてきている。
- 製作やままごとの場で、慣れ親しみのある物をきっかけにしながら自分のやりたいことに関わって遊ぶ姿が見られるようになった。また、3 歳児が遊ぶ姿に興味をもち、まねて遊んだり、同じ場で遊んだりすることに楽しさを感じ始めている。

### 2 教師の願い

- ◎ 一人一人が自分のやりたいことに関わり、繰り返し遊ぶことを楽しんでほしい。
- ◎ 自分のやりたいことを楽しむ中で、友達のしていることに興味や関心をもち、同じことをしたり、同じつもりになって遊んだりする楽しさを感じてほしい。

### 3 保育の実践

教師の援助・環境構成と子どもの姿	教師の援助・環境構成の意図
<p>〈環境構成〉</p>  <p>登園すると、A 児はソフト積み木を並べ、道を作り始めた。偶然細長い三角のソフト積み木を見付け、ペーパー芯を転がし始めた。それを見ていた B 児は、「ピタゴラスイッチ。」と言って同じように転がし始めた。</p>	<p>○ 自分たちで遊びたい場をつくって遊び出せるよう、空間を空けておく。</p> <p>〔空き箱・プラカップ・紙カップ・ペーパー芯・テープ芯 ミニペットボトル・画用紙・折り紙・シール など〕</p> <p>○ 分類して出しておき、子どもたちが自分で選んで作りたい物を作ったり、見立てたりできるようにする。</p> <p>○ 素材は多めに用意し、友達と同じ物を作ったり、同じ物を持ったりして遊ぶことができるようにする。</p> <p>〔ソフト積み木・牛乳パックの囲い など〕</p> <p>○ 自分たちで遊びたい場をつくって遊ぶことができるよう、扱いやすい物、遊び慣れた物を置いておく。</p> <p>① 一緒に楽しむことで、やりたいことを見付けて自分から関わり、楽し</p>

①「わ、転がったね。」と、教師と一緒に転がる様子を面白がった。C児やD児（満3歳児）、E児（満3歳児）も興味をもって見たり、同じように転がしたりし始めた。次第に子どもが増えたことで場が狭くなってきたので、②教師は牛乳パックの囲いを持ってきて、隣にも同じように場をつくった。

③「先生もやってみよう。」と教師は興味をもって見ていたF児に声を掛けながら、一緒にペーパー芯を取りに行った。しかし、ペーパー芯が無くなっていた。教師とF児がペーパー芯を探しながら、A児やB児が転がしている場を見ると、B児はプラカップを転がし始めていた。④「あ、Bくんみたいななのでも転がるんだね。」とつぶやきながらF児と一緒に廃材がある場所を再び見に行くと、同じようなプラカップがあった。F児はプラカップをすぐに手に取り、転がし始めた。さらにそれを見ていたC児も同じプラカップを転がし始めた。プラカップはまっすぐ転がらなかったが、C児やF児は何度も繰り返し転がし、転がる様子を面白がっていた。

すると、今度C児は、テープ芯を見付け、転がし始めた。最初は一つを、繰り返し転がしていた。しばらくすると、廃材の場に行き、テープ芯を2つ繋げて転がし始めた。速く転がることに気付くと、「先生、見て。今度は速くなったよ。」とうれしそうに教師を呼んだ。⑤教師も一緒に転がる様子を見ながら、「本当だ。2つにしたら速くなったんだね。」と声を掛けた。

また、A児は同じ場でミニペットボトルを転がしていた。繰り返し転がして遊んでいると、朝拾ってきたどんぐりをペットボトルに入れて転がし始めた。転がり方が変わったことに気付き、「先生、見て。」と教師を呼んだ。教師と一緒に転がる様子を見て、「どんぐりを入れると速くなるんだよ。」とうれしそうに言ってきた。⑥教師は「大発見だね。」と転がり方が変わったことを一緒に喜んだ。

さを感じてほしいと考えた。

② 一人一人が自分のやりたいことに関わることができるようになった。また、友達のしていることを感じながら遊ぶことができるようになった。

③ 興味をもって見ていたF児が自分から関わって遊んでほしいと考えた。

④ 友達がしていることを見て、様々な遊び方があることに気付いたり、自分なりにまねたりしてほしいと考えた。

⑤⑥ 子どもが気付いたことや楽しんでいることに共感することで、楽しいと感じたことに繰り返し関わったり、友達のしていることに気付いたりしてほしいと考えた。

#### 4 考察

○ 子どもたちが自由に遊びの場を作っていくことができる空間があったこと、子どもたちの興味や関心を捉えて、教師が場を広げたことで、一人一人が自分のやりたいことを見つけて自分から関わったり、友達のしていることを感じながら遊んだりする姿につながった。また、芯材が偶然足りなかったことや、廃材が遊んでいる場のすぐ近くにあったこと、3歳にとって扱いやすい廃材が豊富にあったことで、友達の姿をまねたり、いろいろな物を転がして3歳児なりに試したりする姿につながった。子どもたちが自由に遊べる場の保障や、友達のしていることを感じられる場の取り方、廃材等の物の種類や数をよく吟味し、環境を構成していくことが大切であると感じた。

○ 自分が気付いたり、楽しんだりしていることに共感してくれる教師の存在が、自分から遊びに関わり、楽しいと感じたことを繰り返す姿につながった。また、友達がしていることに気付くことができるような働き掛けをしたことで、自分なりにまねたり、遊び出したりする姿につながり、子どもが心を動かし、主体的に遊び出すきっかけになったと考える。

○ 坂道から芯材やカップを転がすという単純で分かりやすい遊びであったこと、面白いと思ったことを繰り返すことができたことで、満3歳児も含めていろいろな子が興味をもって関わって遊ぶことができる場となった。3歳児と満3歳児が少しずつ落ち着き、遊び出し始めた時期には、単純で分かりやすい遊びの場の設定を意識し、3歳児と満3歳児が自然に集まり、一緒にいる心地良さを感じることができるようにすることが大切である。